

台湾反戦勢力との交流～一問一答

昨年 10 月 26 日、愛知県で開催の「平和大会 in 愛知」の分科会『台湾有事を許さない台湾反戦勢力との交流会』（日本中国友好協会と日本 A A L A とが共同で企画）が、名古屋市港区の港湾会館で行われ、100 人が参加しました。

台湾から来日の傅大為台湾・陽明交通大学名誉教授（写真右下）の講演後の一問一答を報告します。

Q 1 : (台湾の) 現状維持はなぜ悪い選択なのでしょうか？

A : 実際、台湾には現状維持を支持する人が多くいますが、現状維持が必ずしも良いとは限りません。なぜなら、中国共産党の軍事力は今後さらに強くなる可能性があるからです。

私たちは、軍事力が非常に強くなってから和解を試みるべきではありません。和解の条件がますます限られてしまうからです。

Q 2 : 中国本土との統一後にどうするか、の展望は？

A : 統一後にどうするかについては、多くの可能性があります。基本的には中国との対話を経て、より明確になるでしょう。鄧小平が提唱した「一国二制度」以外にも、さまざまな選択肢があります。例えば、大西広教授が述べたように、かつてのソ連にはベラルーシやウクライナが含まれており、彼らも国連の加盟国でした。また、連邦制による統一という可能性もあります。

Q 3 : 交流や和解をどう進めるべきと考えますか？

A : 私は現在の民進党政権はほとんど交流に反対していると感じています。私は、台湾の人々はもっと中国大陆と交流すべきだと思います。

「台湾関係法」は台湾の国会で制定された法律で、台湾とアメリカの条約ではありません。この法律を廃止するかについては、中国、アメリカ、台湾の三者で一緒に考えるべきだと思います。「台湾関係法」は統一に反対しているわけではありません。

そして、武器の問題については、私たちは徐々に購入を減らし、最終的には停止すべきだと考えています。

Q 4 : 現在の政治勢力はどうなっていますか？

A：台湾の野党勢力は主に国民党と民衆党です。この二つの政党は民進党よりも多くの議席を獲得しています。民進党は国会選挙でも総統選挙でも、得票率が過半数には達していません。しかし、国民党と民衆党の間で対立が起きたため、得票率が40%の民進党が頼清徳総統となりました。

（国民党の国会議員に対する）「リコール（解職請求）」投票が大きく失敗した後、台湾の野党は民進党に対抗する新たな希望を見出しました。国民党の新しい主席に鄭麗文氏が選出されたことで、中国大陆との対話や和解を目指す動きも見られます。

Q 5：台湾の人々の世論はどうですか？

A：台湾内部の和解や統一の問題は非常に複雑です。民進党が「反中・保台」というスローガンを強く宣伝してきたことが背景にありますこれまでの世論調査の結果には、中国に対抗すべきとの意見もあれば、和解や交流を望む意見もあり、一様ではありません。

しかし、リコール失敗から見ると、台湾の人々は中国との交流を望み、和解を求める立場に立っていると考えられます。

Q 6：どうして民進党は、国会にいる国民党の立法委員を罷免しようとしたのですか？

A：彼らが「中国の協力者」であるから、と主張しましたが、これは非常に荒唐無稽な理由です。例えば、国民党が「軍事予算を削減すべきだ」と言うただけで、民進党は彼らを中国の協力者だと非難しました。

民進党によるこのような「赤いレッテル貼り」の手法は、リコールが失敗に終わった後、ほとんど効果を失ったと言えるでしょう。

Q 7：台湾人は日本の現状をどう見えていますか？

A：その問題も、非常に複雑です。例えば、民進党は高市早苗氏が首相になることを喜んでいますが、私たちのような反戦を支持する立場から見ると、この状況には強い懸念を抱いています。

私は日本の反戦活動家の見解を台湾の人々に紹介することで、日本に対する見方を変えるきっかけになると考えています。

Q 8：「赤い帽子」という言葉の意味は？

また最近の最近の中国映画についてどう思いますか？

A：「赤い帽子（紅帽子）」についてですが、国民党と共産党は思想的には異なります。しかし、国民党の孫文は初期の頃、共産党と多くの協力関係を持っていました。そのため、

思想が違っていても、「赤い帽子」という言葉は「あなたは統一戦線に取り込まれた」「中国共産党側に引き込まれた」「中共に洗脳された」という意味で使われます。

実際、国民党は保守的な政党ですが、過去には左派に対する弾圧も行ってきました。その後、民進党も国民党のやり方を学び、左派を攻撃するようになりました。

また、『ゼロ日攻撃』という映画は多くの台湾人が「多額の予算を使ったのに、面白くない映画だった」と批判しています。

一方で、中国では『南京照相館』や『?默的榮耀』など、優れた映画やドラマが多く制作されており、台湾でも人気があります。現在の台湾では、民進党による宣伝がある一方で、中国が制作した映画も広く受け入れられており、状況は非常に複雑です。